

いのちを後回しにしない政治をいま、沖縄から。

みおのクロトン便り



第7号2015年10月2日

仲村 未央
沖縄県議会議員

幸せを呼ぶというクロトンのように 多様に 多彩に しなやかに

平和の礎に込められた思い

「平和の礎」が建立されたのは1995年。

平和事業を積極的に推進した大田昌秀県政において、政策責任者を務めた高山朝光元知事公室長と、刻銘委員長として尽力された石原昌家沖縄国際大学名誉教授、お2人のお話を聞く機会を得た。

「全戸調査なくして建立なし」。厚労省の「援護名簿」に従うのではなく、すべての戦没者の名をこそ刻む必要があると、徹頭徹尾、全県民調査の必要を説いた石原さん。

10人の委員による建設委員会が発足したのは1992年12月で、「95年の完成まで3年弱、間に合うかどうか正直気をもんだ」と振り返りながらも、全市町村あげての掘り起しに迷いはなかった高山さん。

2人が「礎」に込めた思いは同じだった。

一家全滅。あったはずの戸籍すら焼けて証明する者もない。そんな家族の無念さを伝えなくてはならない。戦火に追われ身を寄せた壕(ガマ)で、生まれ、名前さえもらわないうちに命を絶たれた赤子。そのぬくもりを、叫びを、忘れてはならない。

戦後50年を目前にして県民あげての大作業で寄せられた戦没者の数、23万4,183柱。

地元2紙に頼み込んで刻銘者の名簿すべてを印刷してもらい、全市町村を通じて閲覧に付し、なお漏れてはいまいか、間違いはないか、点検作業は続いた。「全県民の協力があって成し遂げられた平和の礎はまさに県民の魂のシンボルだ」と高山さんは力を込める。

遺骨もない。最期がどのようであったかさえわからない。けれど確かに存在した、一人ひとりの「命」を、刻銘は証明する。多くの遺族、県民にとって礎は、さすり、水をかけ、花をたむけ、重箱を広げ、「会い」に行く場所だ。

加えて、敵味方、国籍問わず、沖縄戦で失われたすべての人の名を刻み、等しく人命の尊さを訴えたことに、なお世界中から称賛の声が寄せられている。

あれから20年。戦後70年。刻銘追加をあわせ、「命」の証明は、24万1,336柱となった。

平和発信拠点としての「平和の礎」の意義は、いっそう、いっそう大きくなっている。

追伸

◆左記のお話は、「平和の礎」を創設した沖縄の人々にノーベル平和賞を！実行委員会」でお聞きたものです。下写真は高山朝光さん＝写真左＝と石原昌家さん＝同右。「平和の礎」の刻銘の経緯、何より全戸調査に込めたお2人の信念に深く共感し、感動しました。貴重な学びの場をいただきました。



◆翁長知事がスイス・ジュネーブで開かれた国連人権理事会で、沖縄の現状を世界に訴えたことに関連して、ロシア国営通信社「スプートニク」から私に電話取材があり、「日米両政府の不正義は国際社会の価値に照らして許されるのか」との見出しで報じられました。世界各地で関心が広がっています。

憲法、自治、米軍基地問題、こどもの貧困、労働者の権利などのテーマで講演や勉強会も行っています。ご意見、お問合せがありましたら、どうぞご連絡ください。

電話：098-989-1638(みお事務所)、098-866-2702(沖縄県議会会派室)

Eメール：go@miomio.ne.jp

住所：〒904-0011 沖縄市照屋1-7-19(なかむらみお後援会事務所)

